



正徳
後説

夜
光

武
285
1



門中武9
第285
卷1

俗說正誤

攝生俚言解

壽域小酉洞

夜先璧

浪花書肆保興堂繡梓

4/10/1/1

俗說正誤夜先璧叙

搜括自惠

永購

竊惟人之有性也自天而命之
聖人全之立極繼天垂教而民
從之固有焉矣軒岐作而內經
成焉三才之事理無不盡矣君
子者則之而豁然不惑小人者



王...夜先璧

聞之而迷小人失理自欺誣人
是乃誤謬之端也積年累世轉
傳烏焉爲馬是乃誤謬之成也
於是俚言詹詹至不能別虛實
矣於醫事誤之則隕衆命是以
雖田夫藟藟之談而亦不可忽

也因之不醜予固陋蒐輯世俗
之所贈炙有レ關吾道者而按其
所由來而正其所訛謬記以俗
語國字而號謂攝生俚言解童
蒙婦女以此爲階梯則有小補
保生修養之道之萬一而已矣

後君子補益改正則予之固所願也皆

享保十二季歲在丁未立春日原省庵尹方書于樂只堂



俗説正誤夜光瑩上卷目錄

- 養生の術并丹茶と煉るといふ説 初丁
- 寿命の茶病の種といふ説 二丁ウ
- 曰百曰病といふ説 四丁ウ
- 七日を療治の一まゝといふ説 五丁ヲ
- 補茶浮茶の説 六丁ウ
- 酒後茶を飲む説 七丁ヲ
- 素菜瓜のわくに塩茶を飲む説 八丁ヲ
- 癩子茶といふ説 八丁ヲ

蓮根の二子^{れんこん}の^{あか}根^{こん}を^{おとし}説^{せつ} 九丁ヲ

蕺菜^{しやくさい}を^{どん}根^{こん}茶^{ちや}と^{なづ}く^りと^いふ^説 九丁ヲ

章魚^{ちやうぎよ}の^ち血^{けつ}を^くる^りと^いふ^説 十丁ウ

取^あの^{しや}性^{じやう}を^稟つ^り人^{にん}と^いふ^説 十一丁ウ

安蕪^{あんご}の^い廣^{くわう}冷^{れい}の^{しん}沖^{しん}蓬^{ほう}菜^{さい}と^いふ^説 十二丁ヲ

漬^すみ^りの^い焼^{やう}汁^{じゆ}の^い出^いる^説 十三丁ウ

肴^{さく}を^漬る^るを^い水^{みづ}乃^の塩^{しほ}加^か減^{げん}を^卵と^あじ^る法^{はふ} 十五丁ウ

辛味^{しんみ}大^{だい}根^{こん}の^あこ^し時^じ絞^{じやく}汁^{じゆ}を^練く^る法^{はふ} 十六丁ヲ

蕎麦^{そば}の^い病^{びやう}氣^きよ^よと^いひ^りと^いふ^説 十六丁ウ

蕎麦^{そば}の^い温^{わん}じ^りの^とい^ふ説^{せつ} 十六丁ウ

椀^{わん}の^い病^{びやう}氣^きの^あ菜^{さい}と^いふ^説 十八丁ヲ

梅干^{ひめがし}の^い考^{かう}に^い用^{よう}ひ^て菜^{さい}と^いふ^説 十八丁ヲ

批^ひの^い裏^{うら}ま^でも^い菜^{さい}と^いふ^説 十八丁ウ

榧^{けい}の^い小^{せう}使^しを^いび^らと^いふ^説 十九丁ヲ

鬱^{ふさ}の^い温^{わん}じ^りの^あこ^し時^じ陽^{やう}を^い補^ほふ^とい^ふ説^{せつ} 十九丁ヲ

雞卵^{けいらん}の^い性^{じやう}の^い温^{わん}じ^りの^あこ^し時^じ陽^{やう}を^い配^{はい}と^いふ^説 十九丁ウ

山羊^{やうがい}の^い緩^{くわん}繻^{しゆ}魚^{ぎよ}と^いふ^説 十九丁ヲ

木乃伊^{きのみい}と^いふ^説若^わ根^{こん}で^いと^いふ^説と^いふ^説と^いふ^説 十九丁ヲ

蒸石ハ磁石山の方ヲ指シトシテ

廿三下

胡椒の本トシテ

廿四下

甘草ハ乳ヲわびるものトシテ

廿五下

女ハ砥石ヲ越ヘぬものトシテ

廿六下

徐滅目ト彫ヲトシテ

廿七下

滅ト刺セバ精のおつるとシテ

廿八下

夜光璧卷之上目録終

俗説正誤夜光璧卷之上

浪華原省庵若一子輯録

長生の術 丹素と煉とシテ

夫人ハ万物の靈トシテ天地の化育と資クこの

在リ天地と氣ト稱フるヲ物ノ格ニ

知ルルト致リテ人ト醫

至ト醫テ人ニ及ブも是トカカト修

生ト撰つとひくなると日用養生の條ハ

貝原氏の養生訓ニ詳クあるが今更ニ

贅せど養生のなとしつゝ心は貪りしるる物
りに疑ひるけり七情は正不及なり
にそよくの私業職分と節よく勤め行
も天命に任すると心安んじ形衰へば
て壽なり万葉集の歌よ

あろともを何るの心よとこころを

蕨姑射の山も見まをけん

はらうハ莊子の逍遙遊篇よりして讀む
養生の至極あり蕨姑射之山と云神仙の位

何と云ふ何物のやと云ふ心は恬憺虚無なり
といへどもとてみそくといふ人の天より命ずる所
の性も率して心は一点も人欲の私なきことあり
素問の上古天真論は曰く恬憺虚無をなれば
氣は清く後ひ精神肉は充ちて病ひ安んじ後
てり来んとははちとくく行すれどことまが
さあよとれと累とこそ又仙術は丹素と煉る
くも心と修煉するところあり薬のこころはわく
心の脆ハ欠赤さゆへは丹と云ふ又仙術は上中下

の三つの丹田なり是と精氣神の三寶といへど
これと併し壽人と丹と煉りしりありけり
はるごとくハ儒教乃の奥旨に到り神道も
かろひ修りて長生不老の志ありては
了り人ハ天命と承て外に求るることあり

壽命の業病の種といふ説

俚云は是に適りぬると病の種といひ又富貴
と極めてあり欲ひの修りては壽命の業病
といふことハ此誤りあり是ることと知り教を

へて七情の至不及ありけり病の種といふこと
をよまする人ハ是つひは事ハ月叶へむ
まのつらさのどくありぬると思ひ殺けて
と立これと心の依どころと力とて世を
のありこの教は他の嗜好とて承とす
好む者より思ふべき苦と教りて
とくむ乃風よびて必し鼻の流るる
ごとく 景行天皇の御所八坂入媛命の
日く苦とく承とす

ろかー采をひく采とすりたる苦こころは
きさぐ 海よりまき定家々ののちよ

花丸んといきぐ小船り帆をあげて

あけりー風の吹くせわぶりー

まろ呂氏春秋は日く出則以車入則以輦勢は

自佚命之日招璧之楫 いづも入ものりぬこのうてワとカと

肥肉厚酒勢は強命之日烟腸之食 わんらくこすけいづをまこととよあそり

命之日伐柱之斧斤 のいふとふ小しはゆりちきこらんのだひ

三患者安き之所攻也と

上古天去海も久く又芸まところのじも勇乃

害とりしひらり関令子よ云く魚群臭は異な

らん欲して孝は躍れを必ど斃る虎群虎は

果るんと欲して市は出れを必ど捕りると

た聖人の教へのとく富でん礼とこの貧う

してハあて天性よとるりく又孝又悔のこと

るよ勇と持ちて松をさけん心の写をこころは

まゝ万あるはるるのぞう一是を醫乃て
修養生樂の道と知る人とのありをい
て范文成公の曰く儒者宰おとありと
ずんぞ死つゝ良醫とあらん蓋一民と濟ふの功
齊しと云ふ

四百日病といふ説

右より養生の及と忘れたる人ハ已に克ら終る復
ろの情こころをゆくよ人欲の松よひりてあよ七情
と初り一飲食欠欲と恣り一風氣を暑湿と干さ

れ候て内より傷ることを知れば終る病とあり
ても愛窮する一然るよ四百日病といふ名目ハ
孫子親が千金方の診候書に云く凡日氣滯
と合せば神安和と一氣調つるを四百一病と
曰神動候すれを四百日病同時は俱に發る又
云く一病ハ治せずして自愈ゆ一病ハ
瀕く治して愈べ一病ハ治すとつども愈
へざり一病ハ去る死を治せざるとつどもあり

七日と療治の一廻といふ説

減茶葉のりひの湯治は七日を一まわるといふこと
或人の説は風去祀は舒明天皇三年秋九月は
みまよは新喜しあひて温泉は月の下へ入るを
睿覽わりて

三日月の汝湯より川を乾忍はれむ

片輪もあまると七日くくす

この御製より湯治といひつゝ人々を減茶葉
よもひひおろがさるありといはれりしうきくは
接するにいうくより七日と一期とといふことある

にふりての御製とすへたり是七日は陰陽のめぐり
かゝる一周をあらむむあり易経の復の卦乃辞は曰
くく反復其道七日来復となりしは天風姤の卦
より地雷復の卦はふつて陰陽の周を七文めし来
る復るをいふありしをいひて靈樞の平人絶穀篇
に人の腸胃の中は考はるる穀乃分量わ
るて陰飲せざるごと七日うして死する考は水穀
の精氣は液皆をる者也といふもは理あり難
強は十二の難よりはりわりきりしは腹中の食

病も七日してこころくわくするもの程あれを
療治も七日と一周してこころもさあちさく
わくほど

補茶浮茶の程

世俗の心習ひは補茶とらふやうにして
茶浮茶とらふやうくわく茶と覺へたり
誤り也也として病は虚実を辨わり茶は亦補
浮温涼のつてそれくはお徳の茶として病を治
するのあれを補茶と浮茶と優劣はなさむ

のあり御ると素人考へ浮茶は世に
ひぬ補茶は用ひ換ひのありのこころぬ
辨りぞり浮茶と病は補茶を用ゆれを
実よりして邪氣と補治して却て正氣を換ひ病
ひ變異となりて害わるりや
補茶は虚と虚よりても
ありそのうふ病あり人の補劑を飲み茶を
ハ新しき茶は培とりやうなりありて結句
ずりありて越ハ徳賢の方書。医案等に詳あり

酒後茶を飲む程

鬼女のひあらしる僻ちあり王孫君が養生主痛
 二瘰と治する葉方に乾茄と用ひて瘰と葉瘰甲
 と名づくその散ハ瘰甲能く寒熱の疰来と治し
 て瘰の葉は男ゆる葉種あり茄子の性も亦能く
 寒熱乃疰来と治するにりて葉此中の瘰甲な
 りとて吳名と葉瘰甲とらふ予嘗て瘰と患る
 者と治するに男女老幼よりりて茄子を食り
 ひる一人も愈ざるあり亦初は凍ける人の瘰
 して後茄子と食するにうらも再び瘰の患

へち又蔓のものと忌むところも同様ありそ
 中よ黄瓜ハ本草に寒熱と初し多くハ瘰
 と病じところを忌むべし

 ちまりの瓜のうらとハ因食
 の甲より様并ホはゆるハ瘰瘰
 ありこれとべのうら
 とのハちまうら

蓮根ハ三年よある瘰と散すとつと散

俗疾よ藕ハ三年よある瘰と散すとつと散
 ひハ金瘡の平愈しつら後までも是と忌むし何
 うしつらうしやわとりもあはれ瘰あり本草強
 目と曰く藕ハ田血と散し肌とせごとく又曰く

宵月又擣て金瘡傷竹と罽ふとつてこゝろ疵お
疵は搦てはけぬれば疵といふをよめるあり且然か

蕤荷と純根茶と名づくるとつて

俗説よめぐハ佛弟子の般特が墓より細めてせむ
せり般物ハ五瘵して我が名も忘れくハ名
と書て音よ掛けるを塚よせむハ方茶あはれとて
名と考ふとすて名茶と名づくこゝろと食すハ心
氣と浮し純根茶とつてこゝろとつてこゝろと
純根茶とつてこゝろとつてこゝろとつてこゝろと

蒙の案と誣たぐくせる寓云うやあはれ先般物
がな事あはれと天然のゆあり竺土よ名茶の字ま
又名とにあらしとつて名茶の梵語と翻譯せば名茶と
つて名茶とつて名茶とつて名茶とつて名茶と
音うらわらむとつて名茶とつて名茶とつて名茶と
あつゆくよせうがめうぐとつて名茶とつて名茶と
倭女ハ婦の倭女とつて剛柔と別ら名づけ方あり
又名ハ蕤荷とつて覆蓮茶等の異名ハ何れど
純根茶といふ名ハあしとつて名茶とつて名茶と

のよわくび本第徳目よ不詳の形氣と去り蓋
毒を解し瘡を治し沙貴の毒蛇の毒を解し稲
麦の芒の目よ入らうハ根の汁と徳目入らうと
わう徳目ども茶と猪する人足と多く命すれを茶
かと換むとらうとら毒を徳目をゆくあり

章魚ハ血とらうとらをりのとらとら説

章魚ハ 俗よ蛸の字とたこと細目ハやまらあり蛸ハ蝶蛸と
て小蛸蛸の名ありたこハ章魚とも章舉ともいふこ
俚云よ血とらうとらりのとらふことガ俗ありりといふ
らや血と破るといふの俗終あるべしさて章魚ハ血

と破るりのよわくび本第徳目よ時珍が云はく章舉
ハ血と毒い氣と益とと見へり又石距ハ毒わり
けりの蛇の北るところとらふこと徳目茶に足と雜
家の書うもいふとらわらうとらとらども或人西國の
海色うそ小蛇の已まとガと磯辺の岩よ解れと
搏らうけうとらうに潮く裂けとらは足のとら
ぬて水中に入らぬとら又予が磯家の人足とら
筑おにひらる船中。中由浦うそ徳の徳よかま
てわづらうらりのとらゆるにぬハ蛇うそガハく

蓬萊山乃其現といひはさるる所なり享保十一
 年丙午の四月十六日午の刻もけ事なり江波と
 りし所の沖よりほく祿が海といふ處の海の西側よ
 金亀の濱と云へる所なり又金屏と云へる所なり
 く又又の岩と云ふ浪林玉樹金殿樓閣の状とて金
 の光りてまじりてさなる蓬萊山といふべき所のあり
 づらよ三刻をりりのかどりて日のくまよま
 ぐひよのづら消へてりし海はさるるぬり又或
 人の云く越中の岩瀬といふ所の沖は杉原の森の

立ちよるなり 越中と後世のわがの海あり 海のかりては城
 の形わりくと橋の形と云ふなり 独中のこゝにありぬりなり 海のかりては城
 ぐも同ド形と云ふなり 独中のこゝにありぬりなり 海のかりては城
 浪のためと云ふなり 独中のこゝにありぬりなり 海のかりては城
 く姿と云ふなり 独中のこゝにありぬりなり 海のかりては城
 らりし形と云ふなり 独中のこゝにありぬりなり 海のかりては城
 月後の姿と云ふなり 独中のこゝにありぬりなり 海のかりては城
 かと云ふなり 独中のこゝにありぬりなり 海のかりては城
 と云ふなり 独中のこゝにありぬりなり 海のかりては城

ありら海中くわちゆうより吐とき蟹かにといふもの氣きと吐とてあるをいふ
 してその名を海市とも蟹氣拂かにきふきともいふあり俗ぞくに
 蛤かきの氣きといふハ陳蕃ちんはん墨すみが從したがてた王侯おうこうといふ也今いま
 考かんがへよは蟹かにといふものハ二種ふたしゆあり一種ひとしゆハ車螯くるまぢゆうとして
 かくも貝かいの名なありは内うちハ蟹かにと時時ときの濁にごりて上かみありよ
 む七十二候ふたじふにこうより維い大たい水すいより入いて蟹かにと化くわるといふハ爾雅にがく翼よく
 雀すずめ淮わいより入いて蛤かきとあり雉けい海かいより入いて蟹かにとありといふもの
 け車螯くるまぢゆうのことあり今いま一ひと種しゆハ蛟けうの類るいとして蟹かにとの交まじ
 音おん清せいとして去きありよらむ石いしの蓬萊ほうらい山さん三さんつこの表ひら寫しやう
 震しん

ハけりのふありあり本ほん羊やう羆ひ目めの時珍ときちんが云いく蛟けうの属しゆは蟹かに
 あり其その状じやう亦また地ちに似にて大たい角かくありて蛟けうの状じやうのごとくれきん
 の蟹かにわりの鱗りんより下の鱗りんより遠とほざると燕つばめ子こと食くらふ
 能よく氣きを吐といて拂ふきき城じやう郭かくの状じやうと成なる將まさよりあるを
 して其その見みゆ蟹かに拂ふきと名なづけけ之この海市かいしといふこと又また海かい
 待訓たいくん解かいの注しゆは蟹かにハ蛟けうの類るいあり海かいの旁かたわら秋あきの時とき常じやう
 に蟹かによりつて氣きを吐とく拂ふきき人物じんぶつの形かたちのごとくこ
 れを海市かいしと謂いふといふ又また或ある説せつは蟹かに能よく氣きを吐と
 いて拂ふききとあり其その表ひら寫しやうに依よりて其そのよは蟹かに

何れとて至る所の税をひくはるに表交林のわい
どよわつらと忍へるを燕と好む何れとてさもつん
りして又産の疎羞が車螯の氣を吐いて拂きを
ちんとしてつら誤まるるべしは産は車螯ハ大蛤あり
と何れとて蛤乃日ごとくひあつらせるありそを感税
かかしてとどく書を假せばまゝあつらるる志くとも
と食して取よのぬ
りのとすもはゆあり

溪ありより焼畑のせり税

其法の谷汲ハむり候より川の流き出でてそれ

汲きて焼畑は用ひるるよりて谷汲と名付いと
るその後焼畑の畑はとらわたりとてこれ不
儀ありとにわび今も誠好のうらとて溪水は沫
乃流るるを産の植とてとりて炭はあま焚てて焼
畑は用ゆ光るははよけれど硫黄臭く下所のみの
あつとてこれ産ち本産炭目よす石腦油あり
雄黄他ま硫黄いりて
石炭より流き出で泉ありとお新り
はとて出づ肥へて肉の汁のごとく土人茶をひく
扱て缶の中よへるまゝとて雄黄の氣を

蕎麥ハ痲氣マキノ多クシテシびわシと云ク脱

世セ上ダノ蕎麥切ハ痲氣マキノ多クシテシびわシ又申ス
おとシ何ナニ方カタもモ人ヒトノ多クワセ申ス何ナニ方カタもモ自ミ
カニ試シテシ何ナニ方カタもモ自ミ痲氣マキノ多クシテシびわシ又申ス
痲熱マキ何ナニ方カタもモ自ミ痲氣マキノ多クシテシびわシ又申ス
写シ一ヒトクク痲熱マキ何ナニ方カタもモ自ミ痲氣マキノ多クシテシびわシ又申ス
蕎麥ノわワびビりリ人ヒトノ多クシテシびわシ又申ス

蕎麥ハ温カじシりリノ多クシテシびわシ又申ス

世俗セゾクノ蕎麥ノ性セイハ温カじシりリノ多クシテシびわシ又申ス

ノ比ヒ蕎麥湯マキトシテ熱アツシシ湯ユノ蕎麥ノ粉コトカカミミたタて
之コト飲ノミミテ身ミ暖ナまるル氣キト凌シぐグよヨうウテ温カ
あアらラおオとトひヒびビりリ人ヒトノ多クシテシびわシ又申ス
何ナニ方カタもモ自ミ痲氣マキノ多クシテシびわシ又申ス
ノ理リハ温カじシりリノ多クシテシびわシ又申ス
ノ字ジちチらラらラルル小コ豆マメノ稗ヒノ蕎麥マキトシテ熱アツシシ湯ユノ蕎麥ノ粉コトカカミミたタて
あアらラおオとトひヒびビりリ人ヒトノ多クシテシびわシ又申ス
何ナニ方カタもモ自ミ痲氣マキノ多クシテシびわシ又申ス
たタひヒるルよヨうウ陽ヤウ氣キカカハハ殺シスステテよヨクク寒サムヲヲ耐タムム

あり小圃の香中一は山後と従来す方に海と飲る
る人ハ疎々著麦湯と飲る万人ハ疎へ方まで知れ
是丹溪のいふ無きハきよけの理あり又味
汁もて葱と煮て食し風寒の感冒を治する
王安乃が梅は麻黄桂枝のさあり右の著麦湯と
ハ各別の記事ありき幾能治の理園治の士より
ずんむ興にりべくは必と根は膠して葱と鼓す
ことあり

橙ハ疝氣の薬といふ説

橙の疝氣を治するといふと其を薬に名へる氣味
酸く熱く何れは皮をけりて其苦く辛味
檳榔荔枝核呉茱萸等よりつくく似るはわ
るよりその根は多く多く食すれを肝氣と
傷に虚熱と殺すといわらんべ

梅干と梅は用ひて薬ありといふ説

白梅ハきよ食して薬ありとて煮て用ひ感ハ
白湯より入して毎朝食する人わりて強まる金
匱要畧及び本草綱目より多く食すれを齒を換

ト効と傷と脾胃と蝕びとけり又英糖と服す
人よ忌む

桃ハ虫までも茶といふ説

俚俗のことなるは桃實ハ虫までも茶ありといふこと
大さかり鮮云ありな茶は目よ益鏡云く生
ありハむゆ人と換どと又時味云く生桃と多く
食すれど膨脹及び癰癤と生ど損わりて益
とけりそのと白朮茶本よ忌む。茶との心人ハ心
べー又藥と食ひ合すれど心痛と患とけり然ると

茶ありと得くころハ桃の樹ハ邪鬼と避くよめりて
めでたかりのありあり舊事記ハ九厥桃と用ゆ
るハ鬼と避ぐことむし是を縁也とけり又陽羨桃
符と門ハ換け如漢程ハ例ハ用ゆ且桃仁桃花香
能くくといくあり實ハ五菓の二つありとハ脯
て用ゆとハ類云とまはといふ能くけりて食す
ハ毒のさうて能なり

榧實ハ小使とけりといふ説

伊豆に榧實と食ハ小使を縮むといふこととを謂す

男よは銀杏の功効を丸修するありのあり銀杏ハ
小便をけさると止むことなすありびは陳氏が花鏡
よるよりして又俗よ栢の字と樾と別じは樾より
栢ハ栢の字乃俗字よて栢と別してひの本のこ
とあり 名の栢ハ樾よ木の異なり之の 志るを樾よる栢梨
栢ハ樾よ木の異なり之の の庄よりふりつとよきとよて栢梨とよあり
起り栢系の栢の字の俗字よて同トことあり樾の
字にわらば

鱈魚ハ温の性よて陽と補する子悦ハ

世俗よ樾の性ハ温じりありのよて下焦の陽氣を補ふ
とよハ樾よと樾よありなすよ性冷りて水病を
發とありひハ人と扱どつて腎の元陽のあり人
より人并よ脾胃よりさる人よりさる人よりさる
ものあり樾よ陰と補ひ虚熱とあることわりよて
又必ず葱と合せを毒と治さゆへは害なり温まる
とよよ葱とるよの性あり且葱は菌葱 雞子
芥子鴨 鳧 兔 狢 子 合 也
卵の性ハ温りて陽と起るといふ説

狸りは雞けい卵らんハ温ぬるののりて強つよと助たすけ陽道やうだうと壯つよんは
 すりとの六雀むつせきの性しやうとえらぐへ方かたあり卵らんの性しやうハ平へいは
 てんと法はふめえ獲とらと安やすんどもか功こう能のうありりつとも目め
 華け子しが諸しよ家かを弟ていよ水みづ蒸じやうと暖ぬるめ小せう使しと縮ちぢめ耳みみ鳴なるを
 止とじるとわろ腎じんと補おぎなふの謂いひふれど雀せきのこくありも
 のろわらび方かたよろて卵らんハ茶ちやあり雀せきハ却かへて毒どくな
 ると扱あつかするに外が科かハ卵らんと金きん瘡そうハ用もちひく肉にくとわけ
 余あまととひくとれれ食たべて腸胃ちやういと厚あつくするありべし
 さて卵らんハ生なま葱しゆん蒜しゆん薤しやう芥かい李り糖たう米まい雞けいハ子し合あひあり

雀せきハ白はく本ほん李りに子しわひありやべし

葛か藟らいの性しやうハ寒さむく

滂ほうハ葛か藟らいの殺ころ繻しゆハ成なるといふ事こといま古こ書しよハ見みえわ
 ずととども或ある人ひとまさになりて終はつりゆるハ之これ縁えん
 年中ねんちゆうハ河か波はの粉こな浦うらといふ下したの溪せき川がわの岩いわ根ね生なまはひ
 ちり糸いとハ山さん芋ごの蔓つるさひかゆるぐ下したハ自じ然ぜんと去くわ穿せん
 て根ねわしりれちり中ちゆうよみて紐ひもの尾おとぬるちり糸いと
 煎せんる者もののちりてひさびさ子しわびおきたり時ときは
 りのよ思おもひもよとてちりに化かまらゆる縁えんハ

あよかどびるごとく一脱をうてそはくろく紐の皮
あり物もあしくせん割て丸く尾ささハ紐の
肉をて上ハ皮身に堅く皮より先づ魚よりぬりて中ハ
白く山芋をそりりしとどまらるる物より自然菓菜
と竹葉にまらして夢のあさよせけをさかどくしてあは
まぬれを焼く出りに菓菜ハあけて瘦く方紐のわ
まけりしころき好平の山芋のなるを紐よりぬき
ろとを万善人の脱いづきも同ドりありすれを抱朴子
に琴の根緋と化すといひ又本草に陶弘景が緋ハ

是持琴の根の化すなりといふたぐひありて
緋ハ根香より食すとあり又和去は梅醋とすわよ
とありと吉人のいとぶるをぬりて中する者わりあうれ
ども人よりて毒あざれの中するものなり毒とられ
どもまらつてごらねわり一概は痛すぐらば又毒
のわくぬれとすなはすうす

本乃伊とある者誤つてまらに
催痰よ本乃伊の出る國ハ赤石の下よわたりて極熱

の下ありそ申は廣き砂地ありとこととふる人ハ土
 車に乗せて往來す力に劣候つて地は益々焦
 きて木乃伊とぬる又その木乃伊とぬるんとと
 土車に乗せてゆく者車破るところハ木乃伊は
 あるところこそを扱ふことありとつこのころ
 陶九成が輟耕錄より云く木乃伊ハ
 天方國の人年七八十歳より力と捨てて
 海にんと船に乗りて飲食せむ力と捨てて
 と嘴の月を捨てて收漏二夜の蜜とて既ハ餅すりと

西人獲ひたる石の糖と以て一仍て海に蜜を
 用ひてこれを後一年月と扱は擲つてこれを瘞
 と百年の後と俟て都封とさハ何れ蜜劑と成さ
 ずこゝろすから人の肢節を打傷は遇ハバ力と捨て
 走どらるるは急ゆ彼中と天方國のいとも多くゆを
 亦ら力を蜜人と謂ふと何れ何れもせよ我の
 形のもと神聖の風化ゆりて必ふらぬとあり
 磁石ハ慈石山の方と扱とつるは説
 俗説は慈石の針ハ小は磁石の山なり故はその

胡椒の本との説

世乃に胡椒の本とのよりのわり葉ハ揚梅ニ似て實ハ丸く赤さりのありけ本の名ハいまご考へばいごが胡椒のわくは胡椒ハ蔓草の子あり艸本子に云く胡椒ハ南海の島の嶺に出づとも苗蔓草と莖極めて柔に弱し葉のむさ寸半細さ條ろて葉と紐しく條くに子と猪びまとお射みも葉ハ晨ノ完の葉に合ふ合ふ時ハ子と葉の中ハ裏じと又時珍が云く葉ハ扁豆の葉のごく二月ハ葉ハ花

さる子ハ二月ハ熟し二月ハさるとわり

甘草ハ乳をわけるりとの説

俚言ハ甘草を飲めハ乳のわぐるりとのいふこととまじくいふはありまじく一向ハ悪ある婦ハ葉を服すルハ乳はかまふとらぬるわり是こそまじくは耳をえつて漢をうむとのいたぐひあるべしとまじく乳汁のめを治する古方ハ何れも甘草を用ゆ甘草の性ハ平にして脾を補ひ中を和するりのうて乳よわくろくべしとまじく今按ずるは甘草ハ乳を



わづらひのあれを飲地美意と忌ひしよと甘
なまえつと飲うつらよわ又とごと乳をわづらひ
芽のこころを胃の乳を換ずらふらて甘草をか
この味しひを飲と苦くする女の甘草とて乳をわ
らと誤らひつてさうわらさうもせよあ疾
あり

女ハ砥石を裁えぬりのとふ説

せよの砥石を女の裁ゆらばち砥破ることあ
ま虚実を試とぞれども者の善悪が云く
あり

礪石と踏めハ帯下を患ふとあはるふと
わり和漢ともには説われぬは
あり

偷汁目と彫るとのふ説

伊豆よ目ぐさの肩よわりものうて俗人よ彫
る人わり醫の知らざるありといふ誤る俗
めがさといふ偷減眼とて太陽鏡の勢勢よ
るものあり減灸聚英よ日く偷汁眼ハ
細細点みて瘡のこく鍼とみと刺
あり

良し差ゆ実よ太陽の膏熱を解すねばありとあり
 予これを候ふよ手の太陽の肩負の穴より肩中
 の穴の分野よりして糸すらのごとく短くつも
 有りありこれを治滅して刺し破るに法わ
 又退赤散考の
 穀陽うても法を

滅を刺せば糖のかつきといふ説

俗説よ針を刺せば元氣の弱きといふハ膏の王
 燾が外甚秘要よ滅ハ写りて補ありと云ふる
 有り得ていひ傳へるありは説ハ靈樞玉版

篇よ然くせける人を殺して死せる者を起す結
 ばる也とわると玉燾係さつりて滅ハ殺しハすれ
 も活きよのありぬりのと云ふて写りて補ありの
 篇を立つ方ありさうわらず玉版篇の意ハ滅ハ小
 けれども玉燾の兵急よまらりよとのべてこれを用ゆ
 る者よ健みあく病びべしとの殺滅ありとて瘵
 治の法ハ滅灸茶とも病を治して天横の死を
 救ふりのあり天より界ある所の壽命をそてふとる
 人を起してと云ふ何ぞの及らてもありぬしとあり

